

優秀賞

目線をかえる

松江市立東出雲中学校 1年 藤村咲良

私には車椅子に乗っている姉がいます。誰かに車椅子を押してもらうか、電動の車椅子を使わなければ移動することができません。私も日常生活の中で頼まれたことをしたり、車椅子を押したり、荷物を持ったりしています。こうした関わりの中で、姉は身体が不自由だから周囲の人が力を貸すのは当たり前だと考えてきました。エレベーターがあれば使うのは当たり前だと。周囲の人たちの助けや設備のおかげで、姉はやりたいことをやっていきいきと楽しく暮らしているように見えます。反面、姉は助けてくれる人たちに心の中では遠慮しているように見えます。

姉との生活から、私は障がいのある方々と障がいのない方々とのかかわりを意識して見てしまいます。姉には家族以外にもたくさんの友人や支援して下さる方々がいます。皆、姉のことを理解し、心からあたたかく接して下さいます。世の中には障がい者が周囲の人に理解され、あたたかい人間関係の中で充実した生活を送っている例は多くあります。一方、近所のスーパーやホームセンターの身体障がい者用の駐車スペースに平気で停まっている車を見かけることも珍しくありません。私の目には、障がいのある方々に対して「車椅子は大変だなあ」、「かわいそう」、「いいなあ、助けてもらえて」、などという見方をする人がいるように映ることもあります。

私は、昨年全治四ヶ月の大けがをし、松葉づえや車椅子を使う生活を経験しました。車椅子を使って修学旅行にも参加し、先生や友達に車椅子を押してもらって行動しました。多目的トイレを使うこともありました。多くの人たちの手を借りて、友達と同じように修学旅行を楽しむことができ、たくさんの思い出ができました。車椅子の生活を通して、車椅子を使う人の目線を体験することができました。助けて下さる人たちの配慮がとてもありがたいと感じると同時に、人にものを頼むのにとっても勇気がいること、手を貸して下さる人たちに対してとても申し訳なく感じること、行きたいところに自由に行けない不自由さがあることも知りました。

それまで私が感じていた思いとは少し違う思いを感じることもできたような気がします。自分ではどうしてもできないから、人に助けを求めたり、必要な時に必要なものを使ったりするのは当たり前なことだけれど、遠慮や引け目を感じてしまうこと。ユニバーサルデザインは整備されてきたけれど、まだまだ不十分で、障がいのない方々には普通にできることでも、障がいのある方々にはできなかつたり、

難しかったりすることがたくさんあること。そして、人の気持ちを考えれば自分にもできることがいくらかでもあると気づきました。

障がいのある方々と同じ社会で生きていく上で、大切なことがあると思います。

第一に、自分にできることを見つけていくことです。例えば、困っていそうな人に声をかけること、誰にでもあいさつをして地域の方々と会話をする、いつも笑顔でいることです。そうすれば、たくさんの人と良い人間関係をつくることができ、自分を理解してもらえらると思います。その上で頼りにしてもらえれば、相手の遠慮や申し訳ないという気持ちをなくすことができると思います。

第二に、周りをみる力と行動に移す勇気を持つことです。自分中心の見方ではなく、相手の立場や思いを感じとって、発言したり行動したりすることも時には必要だと思います。

最後に、少し意識して目線を変えることです。例えば、自分のことを早くして周りを見渡せる時間を作ること、常に小さなことにも気に留めること、地域のイベントなどに積極的に参加して、いろいろな世代や立場の方々と関わるようにすることなどです。交流を重ねることで、たくさんのももの見方や考え方を知ることができます。自分の見方や考え方が広がることで、ものごとを複数の目線でみるようになると思います。そうすれば、いろいろな立場の人たちの思いに気づくことができるようになるのではないのでしょうか。

これらは、どれも簡単なことではありません。どんなささいなことでも自分にできることを見つけて始めることで、ものごとの見方は変わります。様々な人の目線に立って考えることができれば、社会はもっと優しくなります。私も、これから時間をかけて、いろいろな人たちの目線を想像しながら関わり合える人になれるよう努力したいと思います。みなさんも、普段何気なく見ているものを少し立ち止まって目線を変えて見てみたら、新しい発見があるかもしれません。私が経験したように。